神様と師匠

龍の花嫁　２

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=18344863

モ腐サイコ100, モブ霊, もぶ神様×霊幻

相談所vs神様２話目です。師匠の気持ち編です。

Table of Contents

龍の花嫁　２

あれ？何処だ、ココ。
起きたら日本家屋の座敷にいた。
古いやしろの掃除を頼まれて、『ちぎって』から中に入って、思ったより綺麗だったけど、取り敢えず床掃除しようと腰をかがめたら……意識が遠くなって……。
あの依頼人の婆さんが運んでくれたのか？寝心地のいい布団に、広い座敷。まるで、応接用の客間だ。
「ねえ」
声をかけられてびっくりして振り返る。
上座には、……大人になった、モブがいた。
「モブ！？」
なんで大人に！？また何か能力が暴走でもしたのか！？
「……そうだよ、モブだよ」
……そうだ、モブだ。何を慌ててたんだろう？そこにいるのは、モブだ。
「あなたは私に嫁ぎに来てくれたんでしょう？男は初めてだけど、それも一興かな」
「！？！？！？」
何言ってるんだ、モブ！！
「俺はおまえとはパートナーにはならん。というか、もう別れたはずだろう？」
そうだ。モブが２０歳ぐらいになったころ、自然に疎遠になって、メールでモブから「別れましょう」と連絡があった……はず。
「驚いたな。あなたは私を愛しているんでしょう？」
「そうだな。でもお前から別れを切り出したんだろ」
「そうでしたか。では撤回しましょう。私と愛し合ってください」
「それはダメだ」
むっ、とあからさまにモブが不機嫌に口を尖らせる。
「せっかくお前は幸せになれる道を選んだんだ。もう後戻りはさせない」

「私の幸せは、あなたと一緒になることですよ。大丈夫、みんな祝福してくれます。さぁ、式場に行きましょう」
「ダメだ。別れを切り出したってことは、お前も分かってるんだろう？俺との未来に幸せなんかないってことに」
不機嫌を通り過ぎて、興味深そうにモブがこちらを見てくる。
「男同士で、１４才も差があって、しかもこんな胡散臭い仕事をしている人間だ。大人になったなら分かるだろう。俺はお前を幸せにしてやれない。お前は俺と居ても幸せになれない、んだよ──」
ああ。
愛しいなあ。
これが最後、とたっぷり愛しさを込めてモブの頭を撫でてやる。
「──！」
モブは驚いた様子で、その手をパシっと掴んだ。
嫌だったか。ごめんな。
「なんと純粋で、深い愛情だ」
……あ、れ？この人、モブだよ、な？
「こんなに甘美な感情を喰らうのは初めてです。もっと欲しい──全部よこしなさい」
ぐいと手を引かれて全身にカミナリが走る。
「痛っ！モブ、超能力が漏れ出してるって！！」
モブ？ほんとうに？モブ……？
「あ、ごめんなさい」
……ああ、モブじゃないか。不思議だな、さっきまで疑わしかったのに……。
『ししょう！！』
……？あれ、天井から、モブの声……？
「……まいったな。時間切れだ。ねぇ、ししょうの名前って、どんな漢字を書くんでしたっけ？」
「なんだよいまさら。霊能力の霊に、幻のげんで、れいげん──」

『ししょう！！』

ばち、と目が覚めた。

※※※※※※

茂夫は部屋着のまま、走って依頼人の家まで行った。
「すみません！ししょ……霊幻さんがきませんでしたか！！」
インターフォンを押しても反応がないので、玄関先まで入って扉を叩く。
「おいシゲオ！俺様に薄くでいいからバリア張ってくれ！神気が凄くていづれぇんだよ！」
「……分かった」
しばらくして、青い顔をした老婆が扉を開ける。
「……霊幻様のお連れ様でしょうか」
「そうです！師匠はどこに！？」
「……やしろに入って間もなく、倒れ伏し……やしろの中で眠っておられます」
かたかたかた。
老婆の手が震えている。
「こいつ、霊幻を生け贄にしやがったな」
エクボがつぶやく。
茂夫は怒りが限界に行きそうだったが、まずは霊幻の安全確認が先だとやしろに足を向ける。
「……しめ縄が紙で作られてやがる。まさかアイツこれを『ちぎって』入ったんじゃねーだろーな」
「……おばあさん。師匠はしめ縄をちぎりましたか？」
エクボの疑問を茂夫が通訳する。
「……はい……」
とても言いづらそうに老婆は肯定した。
「やべぇぞ。アイツ何か神と契って神域に入った！」
「ちぎる、って？」
「約束の強い版だ。結婚や婚約なんかがポピュラーだな」
「……言葉の通りでございます」
エクボへの返事に老婆も応える。
老婆はもう、冷や汗でぐっしょりだった。

「……まさか、こんなことになってしまうなんて……」
「このばあさん、何か知ってるぜ。……気を付けろよ、バリア張りながらやしろには入った方がいい」
やしろに入りながらエクボが茂夫にささやく。
「おばあさん。師匠が倒れるかもしれないことを知っていたのですか？」
「……本来なら我が一族の若い、美しい娘の役割でした。だが儀式は成就しないことも多かった。だから失敗するよう、霊幻さんにお願い致しましたのに……」
「儀式……」
「私どもが代々まつっております、龍神様に嫁ぐ儀式でございます。この儀式をおこたると、我が一族には災いが降りかかると言い伝えられております。……ただの迷信と笑う血族も多く……。なにせ３００年ごとに行うものなので、存在自体を知らない者もおります。実際、わたくしも迷信だと思っておりました。……ですが３００年目の去年、孫が若くして突然原因不明の病に倒れた時に、儀式のことを思い出し……。犠牲が出ないよう、先生に依頼したのです」
「騙し討ちじゃねーか」
エクボがつぶやくが、後のまつりだった。
「犠牲が出ないよう、とは？」
「龍神様の好みに合わない娘を差し出してしまった時には、離縁されることが数回あったそうです。美しくない娘や、恋を知らない娘が離縁されました。霊幻先生は失礼ながらおモテにならず、ましてや男です。すぐ離縁されて此方に戻ってくると思っていたのですが……。龍神様のお気に召されてしまったようです」
「ししょう！」
やしろの入ってすぐのところに、掃除用具をぶち撒けて倒れている霊幻がいた。
「しっかりしてください！」
茂夫が仰向けにさせると、ヒヤッと冷たい霊幻の手が腕に当たった。
「つめた……っ」

「彼岸に行きかけてる！おい、呼びかけてこっちに引き戻せ！名前は呼ぶなよ！！」
「……ししょう！」
ゆるゆると。
霊幻の目が開いた。
「ししょう！！ああ、よかった……」
「早くやしろから出させろ！」
エクボに急かされて茂夫は霊幻に肩を貸し、やしろから脱出させる。
やしろから出ると、見る見る霊幻は血色が良くなった。
「この度は私どもの不手際で、危険な目に遭わせてしまい、申し訳ありません……それで、今後についてなのですが」
「今後？」
まだもうろうとしている霊幻が戸惑って聞き返す。
「はい。儀式は7日間行われます。離縁以外で中断させると良くないことが起こると言われています。明日も必ずお越しください」
ぽかん、とする霊幻に。
エクボがかいつまんで事情を説明した。
「まじかぁ……そんなことになってたのか」
「おまえさん、何か覚えてないのか？神域に行ってた間のこと」
「ぼんやりとしか……」
「まぁ神隠しにあってたようなもんだからな。何か覚えてるか？」
「……モブがいた。それと、名前を聞かれたような……」
「まさかおまえ、『命名』とか、『名乗り』とかしてないだろうな？」
「……モブ、って俺から呼んだ気がする」
「だあああ、それで顕現して、神気が増したんだな……！」
「あと、名前も教えたような……」
「……！馬鹿野郎、日本の神々に名前を教えるってことは、命、すなわち魂のありかを教えるってことだぞ……！」
「怒鳴るなよ！知らなかったんだから！……たしか、霊幻、って教えた気がする」
ふしゅる、とエクボの気が抜ける。

「なんだ、名前じゃなくて姓か。ならまだ救いはある。いいか、絶対に名前は教えるなよ。神様に会ったら、とにかく言葉に気を付けろ」
「言葉？」
「コトダマっつってな。日本じゃ言葉に魂が宿るんだ。そこから自分の魂も持っていかれちまう。言霊には気を付けろ。おいシゲオ。婆さんに……」
「おばあさん、師匠が契ったのは婚約ですね？」
ゆるゆると老婆は頷く。
霊幻が目を覚まして、ひとまずほっとしたようだ。
「おばあさん。儀式に関する文献はありますか？」
また茂夫がエクボからの言葉を通訳する。
「蔵に代々伝わる書物があります。お見せしますので、いつでもいらしてください。ご自由にご覧ください。すみませんが、私どもは婚礼の準備で忙しくなりますので……」
しっかりと婚礼の準備を行わないと、私どもが祟られますので、とさらっと老婆が言った。

※※※※※

「しっかし神様の嫁さんとはなぁ……実感がわかん」
帰り道。
茂夫と霊幻は並んで歩いているが、茂夫はあきらかに不機嫌だった。
「師匠は僕のなのに」
霊幻はチラッとエクボを見る。
エクボは気を効かして少し席を外してくれた。
「そうだな」
「……っ師匠、あの、つ、付き合ってるんですし、お、お別れ前に、キ、キス、したいです」
「いいぞ」
「えっ」
あっさりと霊幻は茂夫に唇をあけ渡す。

何度も角度を変えて口付け、ぬるりと舌を潜り込ませた。
「しっししししし、師匠！？」
驚いて茂夫の方が体を離す。そこまでしてくれるとは思ってもいなかった。
「なんかこういうの……師匠ならダメって言うかと思ってました」
「んー？付き合ってるんだし、合意の上なんだから問題ないだろ。それに」
「そ、それに？」
「……いや何でもないよ、モブ。おやすみ、いい夢見ろよ」
……あんなドエロいキスされて、眠れる気がしないよ！と茂夫は思ったとか思わなかったとか。

霊幻は茂夫と分かれて１人でアパートに向かう。
（それに。捕まったっていいんだ、俺は。それで何て報道されるか、見たらきっとモブの目が覚める）
霊幻が見上げると、丁度満月で、月が綺麗だった。
（キスでもなんでもさせてやる。お前のやりたいことなんでも。そしたらすぐ……飽きるだろ？）
恋愛は障害が多いほど燃え上がるのなら、逆にすれば鎮火は早いだろう、と寂しげに霊幻は笑う。

（お前の幸せが俺の幸せだよ、モブ）

悲しげに、でも心から、霊幻はそう思って微笑んだ。

続